

今から七十九年前、八月六日午前八時十五分広島市に原子爆弾が投下されました。昨日までの普通の生活が一変し、たった一発の原爆が多くの尊い命、夢や希望を一瞬にして奪っていききました。命を落とした人。被爆し今も後遺症と戦っている人。当時の様子を思い出し悲しみ、苦しんでいる人。現代を生きる私たちには想像もできないくらい辛く悲しい出来事です。

資料館では、痛々しい火傷や傷の様子、原形を留めていないくらいぼろぼろになった子ども服や焼けた三輪車、街の様子がありません。核兵器によって壊された毎日がいかに悲惨か、目を背けたくなる現実言葉になりません。

原爆ドームの近くに禎子さんの像があります。原爆で亡くなった子どもたちの為に平和を願う「原爆の子の像」として作られました。平和を願って折られた沢山の鶴が捧げられています。像の下には「これはぼくらの叫びです。これは私たちの祈りです。世界に平和をきずくための」と書かれています。あの日の恐ろしい惨劇、悲劇を誰にも体験してほしくないと亡くなった子どもたちが教えてくれている気がします。

灯籠流しの時に小さな外国の女の子に出会い、私は折り紙で折った鶴を膨らませて女の子にプレゼントしました。お母さんは「ベリーキュート」と喜んでおり、女の子は日本語で「ありがとう」とニコッと笑って言ってくれました。私もニコッと笑い、小さな出来事ですがとても嬉しかったです。

今、私たちが当たり前に学校へ通い、友達と楽しく過ごしているのは昔の教訓があったからです。そのおかげで、平和を幸せと感ぜられることを、私たちは忘れてはいけません。一つ一つ折り鶴に込められた平和への想い。千羽鶴の様に人と人が繋がっていったらいいなと思います。いつか世界中の戦争が終わり、家族や友人、大切な人との幸せな日常がずっと続いて欲しいと心から願っています。

一九四五年八月六日、朝八時十五分。たった一発の原子爆弾の投下で、目を開けることができなほどの閃光と、皮膚が溶けるほどの熱に包まれた広島は、一瞬にして全てを失いました。愛する家族、恋人、家、思い出、そして未来も。

私が今回訪れた広島での平和学習で、最も衝撃を受けたものは広島平和記念資料館の見学でした。実際に被爆した方が語る当時の様子や遺品、思いなどが展示されていました。見学時、私はあまりの悲惨さに足が震え、目を背けたくなることもありました。きっと私が感じたもの以上に当時の悲惨な状況は、被爆された方々が忘れることのできない、そしてその後も数えきれないほどの苦しみの連続だったのだと思いました。

私は資料館を見学して改めて「生きるとは何か」と考えました。あの日、無差別に多くの人が苦しみ、亡くなりました。生きたくても生きられなかった、原爆の後遺症で日に日に衰弱して亡くなった方など、約三十四万人の人々の想いを胸に、私は今を大切に生きていきたいと思えます。

この学習を通して、戦争のない平和な日本に生きていることを幸せに思うとともに、戦争が続いている国々の一刻も早い戦争の終結と平穏な生活が訪れることを願っています。

最後に、私たちは日々の生活の中で、様々なことに追われているため、常に核の廃絶や平和について思い、願うことは正直難しいことだと思えます。しかし、一年に一度でも、この時期に私たち一人一人が平和について考えることが大切なのではないでしょうか。私はこれを心がけていきたいと思えます。

皆さん、機会があればぜひ広島平和記念資料館を訪れてみてください。広島まで行くのは大変ですが、苦勞してでも行く価値のあるものだと断言できます。そして、生きるとは平和とは何かを考えてみてください。きっと自分の考えが見えてくると思えます。

平和の尊さ

新発田市立猿橋中学校三年

いわくら だいや
岩倉 大也

私は広島平和記念公園を一望したとき「きれいだな」という印象を受けました。七十九年前、原爆が落とされたようには思えない程のきれいな川、木々がありました。「原爆が落とされた際の広島は、まさに地獄そのものだった」というほど、七十九年前の八月六日の広島はそのような状態であり、およそ十四万人の人が亡くなりました。私はそんな惨状を直接見ていません。ですが、写真や絵、言葉だけでも非常に不快であり、気分が悪くなるものでありました。

「そんな事は二度と起こしてはならない」

私はその言葉に強く共感しました。多くの人々が死に、辺りを地獄の風景にする兵器はあってはならない。この広島派遣事業で改めて認識しました。平和について考え、私たちが身近な人に平和の尊さを伝えていくことが、私たちの唯一できる平和を築くことだと思います。

広島への原爆投下は、戦争の恐ろしさを教えてくれます。戦争に無関係であった子どもたちもこの原爆によって多く亡くなったり、後遺症に苦しめられました。平和の大切さを訴える原爆ドームと広島平和記念資料館を見て、原爆の恐ろしさを実感しました。展示品はどれも平和の大切さや戦争を二度と繰り返さないという強いメッセージがありました。その中には、当時の生活や人々の苦しみを伝えるものが多くありました。原爆によって焼かれた衣服の絵などが展示されており、戦争の悲惨さを物語っていました。また、原爆の影響を受けた人々の生活や復興の過程についても紹介されていました。復興の努力が私に希望の大切さを教えてくれました。

私は、広島を訪れたことで歴史を学び、平和を感じることできる貴重な体験をできました。この体験を踏まえて平和について深く考えていきたいです。

平和について考える

新発田市立東中学校三年 日下部 暖斗

くさかべ はると

昭和二十年（一九四五年）八月六日午前八時十五分、広島に原爆が落とされました。街は焼け、一瞬にして沢山の命が奪われました。

私は、八月六日に広島で行われた広島平和記念式典に参加してきました。式典で印象に残ったことは、広島県知事の挨拶です。湯崎知事は、次の通りに言っていました。

「核廃絶に向けた取組にあらゆる資源の投下が不十分です。片や、核兵器維持増強や戦略構築のために、昨年だけでも十四兆円を超える資金が投資されている。私たちが行うべきことは、核兵器廃絶を本当に実現するため、資源を思い切って投入すること。」

私はこれを聞いてとても共感しました。核兵器を維持するのにお金がかかるなら核兵器を持たなければいい話だと思いませんか。そうすれば、十四兆円が他のことに使うことができ、世界が平和になる大きな一歩になると思います。

そして、私は平和記念資料館にも行ってきました。そこで見たものは、想像を超えるものばかりで、中には気分が悪くなるものもありました。例えば、皮膚が剥がれ落ち、臓器や目が飛び出した状態の水を求める人々、即死はせずとも放射線で体の細胞が壊され、病気になるって苦しむ人などが展示されていました。これらは、現実ではないことのように思ってしまうですが、実際に起こってしまったことなのです。私たちはこの過ちを繰り返してはいけませんし、我々若者を中心に伝えていき、しっかりと原爆に向き合っていくことが大切だと思いました。

新発田市立川東中学校三年 小柳 直人
こやなぎ なおと

私は、八月五日から八月七日まで広島に行ってきました。広島に行って、一番見たかったことや感じたかったことは、原子爆弾が落とされた時の状況です。これを見るために、平和記念資料館に行きました。

平和記念資料館には、当時の写真や原爆が落とされた時に溶けたものなど、今まで見たことがないものが多くありました。中には、目を背けたくない写真もあり、原爆が落とされたあの時の悲惨な状況がすぐく伝わってきました。

その後、平和記念式典に参加し、原爆についての現状を知り、被爆者の想いを感じることができました。家に帰ってきて、最初に思ったことは「世界が平和になるために、また日本が再び核兵器を落とされないためには、どうすれば良いのか」ということです。

私は、二つの選択肢があると感じました。一つ目は世界から核兵器を無くすこと。二つ目は日本も核兵器を持つことです。「核兵器を持つ」ことについては、インターネット上でも動画などで様々な意見が氾濫し、そのメリットを主張する動画も多く見られます。

やはり、私が思う一番理想的な姿は、「核兵器を無くすこと」だと思います。しかし、核兵器を世界から無くすことは、本当に難しいと思います。なぜそう思ったかというと、広島での平和記念式典に参加している各国の代表の人たちがどのようなことを考えているのか。あくまでも想像でしかありませんが、一部の国では核兵器を無くすことよりも、核兵器を持ち、「自分の国に対してはこんなことをさせたくない」という思いを持っているのではないかと考えてしまいます。なぜなら、現在の世界情勢の中で自分の国の利益のために戦争が続いている現状があるからです。もちろん、参加した多くの国は本気で世界平和を願っていると思います。

私たちが今考え、議論するべきことは、世界平和を目指すために「広島で起きた歴史を知り、そして今の日本や世界の現状を知り、今後何をどのように行動すれば良いのか」だと思います。

皆さんにも、もう一度世界平和について考えてほしいと思いました。

広島に行き、考えたこと

新発田市立七葉中学校三年 加藤 志依 かとう しえ

私は、広島で主に平和記念資料館の見学、広島平和記念式典への参加、原爆ドームを実際に見るといふ貴重な体験をしてきました。

平和記念資料館の見学では、学校の教科書では見たことのない、戦争の生々しさをを感じる写真や被爆者の想いをつづった資料を見て、戦争の恐ろしさを改めて感じる事ができました。

広島平和記念式典では、「平和」という言葉の重みとともに、日本に限らず世界中の平和がどれほど大切であるのかを感じました。広島平和記念式典は世界各国から多くの人が一同に集まり、平和のついで考えていく大切な機会であり、世界中の平和を築いていくためにはとても重要な式典であると実感しました。

原爆ドームは、写真で見ると実際に見るのとでは、大きく異なりました。実際に見ることで、原爆による大きな被害を受けたことが分かりました。

この三日間で、戦争の恐ろしさだけでなく、原爆が何も罪のない人々を無差別に巻き込み、殺したという事実の悲惨さや人々の苦しみや悲しみを感しました。この事実を知った上で、私たち一人一人がこれからもっと過去の過ちから未来について考えていくべきであり、「平和」であることの重要性に日々強く向き合っていきたいと思いました。

広島で胸に刻まれた人々の想い

さとう しょうま

新発田市立佐々木中学校三年 佐藤 昇真

僕は佐々木中学校の代表として、広島平和記念式典及び関連事業に参加させていただきました。

最初に訪れたのは平和記念資料館でした。そこには苦しむ人々の写真、被爆した人々が着ていたボロボロの衣料品などがありました。見ているのも苦しいぐらい衝撃的なものでした。しかし、「この出来事を受けとめなければならぬ。そして戦争の辛さ、恐ろしさを伝えなければならぬ。」と感じました。

次に訪れたのは原爆ドームでした。原爆が落とされても残っていた原爆ドームは様々なことを伝えていきます。実物の原爆ドームを目にして、戦争の恐ろしさが伝わりました。

その次に訪れたのは広島平和記念式典でした。式典では、「戦争は絶対に繰り返さない。」という固い意志や平和への意識が伝わりました。また、「この国は、誰もが笑顔で生きられる平和な国になれる。」という希望があることも伝わりました。

最後に訪れたのはとうろう流しでした。沢山のとうろうが川に浮かんでいました。それだけ沢山の平和への思いが広島に存在しているのだと感じました。

この広島への派遣を通して、平和について多くのことを学びました。今までニュースや新聞で目にする程度でしたが、現地を訪れ、実感することによって被爆した人々の思いが私の胸に深く刻みつけられました。今度は私が学んだことを伝えていこうと思います。

私は、「原爆の日」とされる八月六日に広島市で行われた平和記念式典に参加しました。この体験で私が感じたことは、現代を生きる人々の戦争に対する様々な考え方があり、それらの考え方の食い違いがあるという問題です。

私は資料館を訪れ、展示されていた戦争の悲惨な状況を見てきました。中には目を覆いたくなるようなものもあり、私は日本のみならず、世界で戦争そのものが無くなれば良いなと思いました。

式典会場の付近には、戦争の悲惨さを伝える被爆者の関係者や、海外からの来賓の姿があり、戦争根絶を訴える声も数多く聞きました。中には戦勝国の立場や敗戦国である日本の立場について語る人々がいた他、大音量で戦勝国を批判する街宣車の姿がありました。同じ戦争について語っている内容でも、立場が異なれば戦争の見え方や主張が変わるのだと感じました。戦後七十九年経過した今でも、人々は戦争に対して同じ意見で向き合えていないのだと思いました。

残念なことに、今この瞬間にも世界では戦禍の中にいる人々があり、広島資料館で見たような悲惨な状況が続いています。

今回、私が式典で経験した内容と感想を伝えることで、人々が少しでも戦争に関心を持ち、戦争を無くすという目的を共有できたら良いなと思います。

私はこの夏、広島平和記念資料館や原爆ドームを訪れ、当時の広島の様子や原爆の恐ろしさを知ることができました。

原爆ドームを初めて目のあたりにして、写真で見るよりも全く迫力が違いました。近くで見ると鉄骨が剥き出しになっていたり、レンガの壁にひびが入っていたりと、原爆の威力の大きさを感ずることができました。

また、資料館には、沢山の被害を受けた人々が着ていた衣服や原爆により亡くなった人々の写真などが展示されていました。その亡くなった人々の中には私たちと同じ中学生や、まだ生まれて間もない赤ちゃんもいました。それを見て私は、原子爆弾は罪のない人々の命をいとも簡単に奪い去ってしまう恐ろしいものだと感じました。

現在の広島はとても綺麗な街並みでした。原子爆弾が投下されてから七十九年までここまで発展できたのは、この地に住む多くの人々の想いや苦勞があったのだらうと考えました。

現在、世界ではロシアとウクライナの戦争や紛争、テロなどが起きています。平和は願うばかりでは訪れません。私たちは、自分から行動を起こさなければなりません。私は今回、戦争の悲惨さを改めて学びました。これからも学び続けるとともに、学んだことを周りに伝えることで、日本、そして世界へと平和の輪を広げていきたいです。

広島原爆について実感したこと

新発田市立加治川中学校三年 阿部 太紀

あべ たいき

「ドーン」

今から七十九年前の一九四五年八月六日午前八時十五分、鼓膜が破れるほどの大きな音。立ち昇る黒みがかった朱色の雲。人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で街は埋め尽くされた。

原爆の悲惨さを学ぶために、私は中学校の代表として広島を訪れました。この訪問は、私にとって大きな意味を持つ経験でした。広島は第二次世界大戦中に世界で初めて原子爆弾が投下された場所であり、それにより多くの人々が命を失い、街全体が壊滅的な被害を受けました。

原爆資料館を訪れた時、私は当時の出来事を目の当たりにしました。特に印象深かったのは、子どもたちが使っていたランドセルや衣服、そして家族と過ごした時間が一瞬にして奪われたという事実です。

平和記念式典では、内閣総理大臣をはじめとした多くの人とともに、原爆の犠牲者に祈りを捧げました。平和の鐘が鳴り響く中、私は戦争や核兵器の恐ろしさを改めて感じ、平和を守る責任が私たち一人一人にあることを強く実感しました。

この訪問と式典への参列を通じて、戦争の恐ろしさだけでなく、今を生きる私たちがどれほど平和の中で守られているかを実感しました。平和を維持するためには、私たち一人一人が戦争の記憶を風化させないよう努力し、次世代へ伝えていく必要があると感じました。

私にできることは、限られているかもしれませんが、日常生活の中で平和の大切さを意識し続け、広島で学んだことを家族や友人に伝えることが今できる一歩だと思います。原爆の悲惨さを知ることが、平和な未来を築くために不可欠です。この訪問は私にとって忘れない貴重な経験になり、戦争と平和について深く考えることができた三日間でした。